

『今月の天候と農作業』

通巻第5617号
7月号
平成30年7月5日発行
宮崎県
宮崎地方気象台



【特に注意を要する事項】

期間の前半は、気温がかなり高くなる見込みです。

【予報のポイント】

- ・暖かい空気に覆われやすいため、向こう1か月の気温は高いでしょう。特に2週目は気温がかなり高くなる可能性があります。
- ・太平洋高気圧に覆われやすいため、日照時間は平年並か多いでしょう。また、期間のはじめは活動の活発な梅雨前線の影響で大雨になるおそれがあり、向こう1か月の降水量は多い見込みです。

【確率(%)】

要素	予報対象地域	低い (少ない)	平年並	高い (多い)
気温	九州南部	20	30	50
降水量	九州南部	20	30	50
日照時間	九州南部	20	40	40

【予想される向こう1か月の天候】

向こう1か月の出現の可能性が最も大きい天候と、特徴のある気温、降水量等の確率は以下のとおりです。

平年に比べ晴れの日が多いでしょう。

向こう1か月の平均気温は、高い確率50%です。降水量は、多い確率50%です。日照時間は、平年並または多い確率ともに40%です。

週別の気温は、1週目は、平年並の確率50%です。2週目は、高い確率60%です。3～4週目は、平年並または高い確率ともに40%です。

<1週目の予報> 7月7日(土)～7月13日(金)

期間のはじめは前線や湿った空気の影響で雨となるでしょう。その後も湿った空気の影響で雲が広がりやすいでしょう。

※明日から1週間の、日別の天気や気温などは、

週間天気予報 (<http://www.jma.go.jp/jp/week/>) を参照してください。

<2週目の予報> 7月14日(土)～7月20日(金)

太平洋高気圧に覆われやすく、平年に比べ晴れの日が多いでしょう。

<3週目から4週目の予報> 7月21日(土)～8月3日(金)

平年と同様に晴れの日が多いでしょう。

普通作物

◆早期水稲

1 水管理と防除

台風が来る際には、倒伏を軽減するため深水とし、台風通過後も吹返しの高温乾燥風で収量・品質に影響が出ることがあるため、風がやむまで十分な湛水状態を保ちます。収穫前の落水は、収量や品質が低下しないよう収穫5日前とします。

カメムシやいもち病の防除を行う場合は、収穫予定日を考慮し、農薬の使用期限内で行います。

早期水稲ではカメムシ被害が品質低下要因の上位となっており、2回防除が基本です。今年も注意報が出ており、発生予察情報や圃場の観察に注意し、発生が多い場合は追加防除を行います。

2 収穫と乾燥調製

米の食味や品質には、適期収穫と適正な乾燥調整が大きく影響します。収穫適期は全籾の8割が黄化した時期です。早刈りでの青未熟粒や、刈り遅れによる胴割れ粒に注意します。収穫後は速やかに乾燥作業へ移し、乾燥は40℃以下で行います。例年、過乾燥の玄米が多くみられるので、適正水分の14.6～15%に仕上げましょう。

◆普通期水稲

1 水管理

中干しは茎数が20本程の頃とし、田面に足跡が軽く付く程度とします。中干し後は、走水を1～2回行い、その後は間断かん水で管理します。

2 病虫害防除と追肥

葉いもちやウンカ類が発生しやすい時期なので圃場観察と予察情報に注意し防除を行います。追肥は「ヒノヒカリ」では幼穂長が1cmの頃に行い、葉色により施肥量を決めます。「おてんとそだち」の施肥量はヒノヒカリより少なめに行います。ヒノヒカリでは、窒素の追肥量が多いと食味の低下や倒伏が懸念されますが、窒素が不足しても出穂後の高温で白未熟粒の発生が助長されることがあるので、適正な施肥量に注意します。

◆大豆

1 圃場準備と播種

苦土石灰で酸度矯正を行い、元肥量は前作を考慮し行います。発芽が揃うよう耕耘は丁寧に行い、圃場周囲には排水溝を設置します。播種は発芽安定と鳥害軽減のため、薬剤を粉衣し、条間60～70cm、株間10～20cm位で行い、覆土は2～3cmにします。播種が7月下旬以降になる場合は密植にします。

(荒砂英人)

施設野菜

◆夏秋野菜の高温対策

中山間地域の露地きゅうり、雨よけトマト、ピーマンなどでは本格的な収穫時期となります。

雨よけ栽培では梅雨明け後の高温対策が重要となりますので、ハウスは日中できる限り解放して換気に努めるとともに、寒冷紗などを利用し、2割程度の遮光を行い、ハウス内の気温低下や果実・葉の温度が上がらないように管理します。

特に、曇雨天後の晴天日は萎れやすくなるので、早朝からのかん水や、翌日が確実に晴れの場合は、前日の夕方のかん水も効果的です。

なお、薬剤散布は、高温時に行うと葉焼け等の障害が発生しやすいので、日中高温になる時間帯を避けて、午前中の早い時間帯か午後温度が低下する時間帯に行います。

◆いちごの育苗管理

年内の収量を確保するため、7月中旬までには採苗を終え良質苗の生産に努めましょう。採苗後のかん水について、晴天時は早朝に充分行いますが、乾燥するようであれば午後にも夜間に過湿にならない程度にかん水します。

幼苗時期の施肥量は多すぎないように注意し、施肥は鉢底から根が確認できる時期から行います。

病虫害防除について、炭そ病は定期的な薬剤散布を行い、発病が疑われる場合には周辺の株とあわせ直ちに処分してください。ハダニについても発生を確認したら直ちに防除を行うなど徹底した管理を行います。また、うどんこ病予防のためにも育苗床での徹底防除が重要となりますが、肥料であるケイ酸カリを1株あたり2～3g施用することにより、本圃での発病を抑制する効果があります。

(黒木正晶)

葉茎菜類及びいも類

◆さといも疫病への対策

近年、さといもの疫病が各地区で多発し、深刻な被害が出ています。新しい葉の展開に併せ、定期的な予防を続けましょう。

◆秋冬野菜の土づくり

秋から冬にかけて栽培する野菜の収量・品質を高めるためには、夏場のほ場管理が重要です。今月は土壌pHの矯正や深耕、堆肥等の有機物の投入、緑肥栽培による土づくりを行いましょう。

◆かんしょ

4月植付けのマルチ栽培が収穫期となります。植付け後110～130日が収穫の目安ですが、90日を経過したら試し掘りを行い、芋の肥大状況を確認して収穫を始めてください。収穫が遅れると皮色や形状が悪化するため適期に収穫をしましょう。

◆さといも

肥大には土壌水分が大きく影響します。梅雨明け後は、さといもの葉面積が日増しに大きくなり、蒸散量も併せて増加するため、早めのかん水を心がけ草勢の維持に努めてください。

3月植えの石川早生は下旬から収穫期となります。試し掘りを行い、肥大状況を確認してから収穫を始めてください。また、収穫が遅れると「水晶芋」が発生し、品質低下につながるため、収穫は計画的に行い、8月中旬には終了するようにしましょう。

中生種は7月上旬から子芋の肥大、孫芋の着生時期となります。梅雨明け頃を目安に追肥・土寄せを行ってください。また、中生種は乾燥による芽つぶれ症状が出やすいため、適宜かん水を行い、品質向上に努めて下さい。

◆しょうが

今月上旬が1回目の追肥適期です。10a当たり窒素成分で3～5kgを施用し、追肥効果を高めるために、土寄せも行ってください。また、梅雨明け後は急激な気温の上昇と乾燥が予想されるため、早めのかん水を行います。なお、畝間かん水をする場合は滞水しないよう注意しましょう。

(杉村幸代)

果樹

1 常緑果樹

◆かんきつ全般

前回の薬剤散布から300mmの降雨があると薬剤の効果がなくなります。250mm程度の降雨があったら次の薬剤散布を行いましょう。

◆温州みかん

7月中旬から収穫前までが仕上げ摘果の時期です。極早生温州では、7月10日の果実横径は、38～48mmが理想です。今年の極早生温州は、着果量が多い傾向が見られますので、特に結果量が多く、肥大の悪い樹については早めに仕上げ摘果を開始しましょう。

結果部位によっても摘果時期が異なります。樹冠下部は早めに、樹冠上部は遅めに摘果することで、適正な肥大を確保しましょう。樹冠上部の天なり果を摘果すると、夏枝が発生しますので、収穫時に除去しましょう。

◆完熟きんかん

開花期のアザミウマ類や灰色カビ病の発生は、果実品質を大きく低下させます。開花期の防除を実施するとともに、枝をゆすって、花びらを落としましょう。

満開期にビニル被覆を行った園地では、高温による結果不良が出始めるので、早めに除去しましょう。

◆マンゴー

梅雨があけると強い日射により果実に日焼けが発生する場合があります。日焼け対策の遮光ネットはこまめに開閉しましょう。

収穫が終わったら、剪定作業に入ります。7月下旬以降の剪定は、新梢の充実が不足し、花芽形成が不安定になるため、早めに行うように心がけましょう。

どうしても下旬以降の剪定になる場合には、夜間24℃設定で加温し、昼間も換気開始温度を32℃に設定することで、昼夜共に施設内温度を確保し、新梢の発生と充実促進を図りましょう。晴天日の昼間については、極端な高温に注意しましょう。

既に新梢が発生している早期作型園では、葉面散布や発根促進剤の利用、新梢の整理によって、新梢の充実促進を図りましょう。

(鈴木美里)

花き

◆キク共通

梅雨明け後は曇雨天から一転し、日差しの強い日が続きます。葉焼け等が発生しやすい時期なので、本ぽでは遮光や換気を行い、葉温の低下を図るとともに、蒸散量の増加に見合うように適宜かん水を行います。

また、親株ほ場では防除を徹底し、苗とともにアザミウマ類やダニ類、白さび病を本ぽに持ち込まないよう気を付けます。

◆夏秋ギク

「精の一世」の8月出荷作型では、花芽分化・発達を促すために消灯後から11時間日長でシェードを実施してください。また、高温により草丈の伸長不良、開花遅延や奇形花が発生しやすくなることから、日中は十分な換気を行います。

「フローラル優香」では、消灯後から12時間日長で2週間程度のシェードを実施してください。高温や消灯遅れ、多肥によって貫生花が発生しやすくなることから、適正管理に努めましょう。

◆秋ギク電照

「神馬」系品種は、穂の冷蔵期間が長くなると定植後の活着が悪くなる傾向にあり、幼弱性を獲得する恐れがあるため、冷蔵期間は3週間を目安とします。

低温開花性系統である「神馬66-4」「神馬2号」は、高温に遭遇すると腋芽が出にくくなる傾向にあり、場合によっては穂が不足する恐れがあります。親株床はできるだけ涼しく

し、親株の株数も余裕を持って植え付けましょう。

◆洋花類共通

秋に定植するほ場の土壌診断を必ず実施し、分析・診断結果に基づいた適正施肥に努めましょう。

また、改良太陽熱消毒等の土壌消毒を必ず実施し、連作障害の回避に努めてください。

なお、土壌消毒の期間が短いと、地温が十分に上がらず、消毒効果が得られない場合があります。十分な期間を確保できるよう早めに準備を行いましょう。

◆トルコギキョウ、デルフィニウム

冷房施設等を利用した育苗期となります。適切な温度管理を実施し、早期抽だいやロゼットの防止に努めてください。

◆ホオズキ

8月出荷分は、上旬から段階的に摘心及び着色のためのホルモン処理を実施してください。また、各種病害虫の防除はホルモン剤散布の1週間前までに行ってください。

ホルモン剤散布後の高温は着色不良の原因になります。散布はできるだけ涼しい早朝に実施し、散布後数日は必ず寒冷紗により遮光しましょう。

◆露地花木類

定植間もないシキミの幼木や収穫中のキイチゴ等は、梅雨明け後の急激な高温・乾燥により枯死する危険性があります。かん水の実施や株元に敷きわらなどでマルチングを実施し、極度な乾燥を防ぎましょう。

また、キイチゴは過度な収穫により樹勢が急激に低下して枯死する恐れがあることから、樹勢維持のために数本残すように管理を行います。

(藤原明紀)

畜産

◆家畜

梅雨が明け、本格的な夏を迎え、家畜や家禽の生産性が低下する時期に入ります。畜舎への風の通りを良くし、換気扇や細霧装置による、降温対策を十分に行いましょう。また、畜舎内への直射日光を遮蔽するために、寒冷紗の設置や、屋根の散水、石灰、白ペンキ塗布も有効な暑熱対策となります。

乳牛は、暑熱ストレスの影響が高まる時期になります。ヒートストレスメーターの温湿度指数（THI）を毎日チェックし暑熱対策を行いましょう。また、牛舎ファンを常に回し、全ての牛に直接風が当たるようにします。

夏場は全ての家畜で、他の季節より多くの水が必要となります。いつでも、新鮮な水が飲めるようにしてください。また、肥育牛では、ウォーターカップを飲みやすい水槽に変更したことで、出荷体重と枝肉重量が大きく改善された事例もあることから、飲水管理は非常に

重要となります。

豚・鶏では、出荷前の肉豚やブロイラーの事故率の上昇を抑えるために、飼養密度を低くして、飼養環境の改善を図りましょう。また、寒冷紗の設置で直射日光を遮り、換気扇やダクト、あるいはミスト機による散水で畜舎内温度の上昇を抑制しましょう。さらに、飼料の腐敗やカビの発生には、十分に注意するとともに、ウォーターカップやピッカーなどの飲水の確認も十分に行ってください。

◆飼料作物

牛の粗飼料では、サイレージが腐敗しやすい時期になります。サイレージの色が黒くなったり、手で触って熱く感じる場合、いつもと匂いが違う場合は要注意です。絶対に給与しないでください。

(三角久志)

特用作物

◆茶

1 三番茶の摘採

二番茶の摘採から35日程で三番茶の摘採期となります。この時期は、新葉の硬化が早いので摘み遅れに注意します。荒茶の価格と経費を考慮し、計画的で無理のない摘採に努めます。

2 病虫害の防除

害虫では、新芽生育期に発生が多いチャノキイロアザミウマ・チャノミドリヒメヨコバイとハマキムシ類です。摘採後は、速やかに輪斑病等の防除を実施します。

また、県内の茶園でもチャトゲコナジラミの発生が拡大しています。この害虫は、茶の新芽生育期に成虫となり茶園を飛び回るため、茶園や製茶工場の生葉置き場を観察します。なお、本虫に対する問い合わせ等は、最寄りの農業改良普及センター等関係機関へ連絡をお願いします。

3 更新茶園の整枝

一番茶後に中切りした茶園は、7月上旬と8月上旬に2回の整枝を行います。また、二番茶後に中切りや深刈りした茶園は、8月上旬までに1回整枝を行います。整枝は、いずれも中切りや深刈りの位置から3～5cm上げた位置で実施します。特に、中切り実施茶園の整枝は天候に注意し、2回に分けて行う等日焼け防止に注意します。

4 幼木園の管理

定植当年の露地苗は根域が浅いため、梅雨明け後の干害に注意します。また、ペーパーポット苗でも、植え込みが浅くポット上部が地表から出ている場合は、ポット内の土壌が乾燥し苗が枯死することがあります。いずれも、土寄せや敷きワラ等を行い土壌の乾燥を防ぎます。

1～2年生の幼木園は、台風に備え7月中～下旬に徒長枝の摘心やせん枝を行います。ま

た、ソルゴーの間作は防風効果が高いので台風対策に有効です。播種は、必ず7月上旬までに行います。

(黒木清人)

◆しいたけ

伏込み地の湿度管理と高温対策を徹底し、健全なほだ木づくりに努めましょう。

1 裸地伏せの場合

笠木を厚さ30cm程度に補充し、直射日光による高温障害に注意するとともに、周囲の刈払いを実施し、風通しを良くしましょう。

2 林内伏せの場合

直射日光が当たる箇所には、笠木の補充や遮光ネットを設置しましょう。特に湿気が多い場合は、ほだ木の積み替えや天地返しを行うとともに、周囲の草刈りを実施し、風通しを良くしましょう。

3 人工ほだ場の場合

特に高温・乾燥の害を受けやすいため、遮光ネットによる日陰の調整や散水などにより、温度と湿度の管理を徹底しましょう。

(古澤英生)

◆たばこ

今月は、総掻きが主な作業となります。

1 総掻きは、未熟葉の収穫を避けるため、上位本葉の成熟を確認して開始しましょう。成熟の目安としては葉色だけではなく、葉や中骨が左記の状態になっているか確認して下さい。

- ・葉の表面が凹凸になり葉先が枯れる。
- ・葉全体が下方に巻き葉柄部が下った時（肩を落す）。
- ・上位葉（4枚目）の中骨が白化して中骨の表面が平らとなり中心にミゾができ、ポキッと明音がして折れやすくなる。総掻き時の注意点として着位区分は徹底しましょう。
- ・持てない流れそうな合葉の拾い取りを確実に言い、収量確保に努めましょう
- ・上葉は標準的な心止めをした作は、4枚程度を目安に区分収穫し、包内品位を高めましょう。
- ・立枯葉は活力のある内にグジリ取りを行いましょう。乾燥は、当日吊込みが良いです。

2 残幹は土壌中の病原菌密度の増加につながりますので、収穫終了後、早期に除去し、ほ地外へ持ち出して、耕種的防除に努めましょう。

3 異物・異臭・虫害発生防止のため、作業場の定期的な確認と清掃を行いましょう。

また、早期販売に向け、出荷包の事前確認を行いましょう。

(宮崎県たばこ耕作組合)

内容の詳細について

7月の天候と農作業の詳細内容について。執筆は県農業経営支援課及び森林経営課、宮崎県たばこ耕作組合が担当しています。各作物の病虫害の防除対策、気象災害の事前事後対策等の詳細は最寄りの支庁・農林振興局（農業改良普及センター）へ。

☆「今月の天候と農作業」はホームページにも掲載しています。

(<http://nougyoukishou.pref.miyazaki.lg.jp>)

向こう1カ月間における農作物の主な病害虫の発生量と防除対策

作物名	病害虫名	発生量	発生状況と防除対策
早期水稻	穂いもち 紋枯病	やや少 並	<p>葉いもちが発生している場合は、穂ばらみ期から穂揃期の防除を確実に 行います。</p> <p>カメムシの発生が、平年よりやや多い状況です。カメムシによる被害 は、早期米の等級格下げの重要な要因ですので発生に注意し確実に防除し ます。穂揃期とその7～10日後の2回防除を徹底します。防除後も残存虫が 確認される場合は、さらに3回目の追加防除を行います。</p>
	セジロウンカ ヒメトビウンカ 斑点米カメムシ類	やや少 やや少 やや多	
普通期水稻	葉いもち	並	<p>本田での初発生に注意し、早期防除に努めます。</p> <p>移植時に箱施薬をしていない水田では、防除が手遅れにならないよう に注意します。</p> <p>海外飛来性害虫（セジロウンカ、トビイロウンカ、コブノメイガ）の今 年の飛来数は少ない状況です。飛来状況については、当センターのホーム ページ等で随時提供していますので、確認ください。</p> <p>ニカメイガは、近年飼料イネにおいて被害が広範囲で確認されていま す。7月上中旬頃の発蛾最盛期に粒剤を施用するのが効果的です。</p> <p>スクミリンゴガイの生息数が多い場合は、粒剤の水面施薬か捕殺を行いま す。</p>
	ツマグロヨコバイ セジロウンカ ヒメトビウンカ コブノメイガ ニカメイガ スクミリンゴガイ	並 並 並 — — やや多	
野菜・ 工芸作物	アブラムシ類	やや少	<p>アブラムシ類は、各種のウイルス病を媒介しますので育苗期から防除し ます。育苗施設は野外からの飛び込みを防ぐために、防虫ネット等で被覆 すると効果的です。</p> <p>ハスモンヨトウは、ふ化直後に集団で加害し、分散してからでは薬剤が 効きにくいので、この時期の発見に努め、若齢幼虫期に防除を行います。</p>
	ハスモンヨトウ タバコガ・オオ タバコガ	並 並	
ウリ類	黄化えそ病 (MYSV)	—	媒介虫であるミナミキイロアザミウマの生息密度を抑制するため、定期的 に防除するとともに、ほ場周辺の除草に努めます。
サトイモ ※	疫病	—	圃場の見回りを行い、発生を認めたら直ちに、薬剤が下葉に達するよう に十分量を散布しましょう。
果樹全般	果樹カメムシ類	やや多	<p>予察灯へのツヤアオカメムシの誘殺数がやや多い状況です。</p> <p>成熟の早いナシ・ブドウ等の果樹類を集中して加害する恐れがあります ので、園内外を見回り、早期発見・早期防除に努めます。</p>
カンキツ (露地栽培)	黒点病	並	<p>黒点病は、降水量が多いほど発生が多くなるので、前回の防除から積算 降水量250mmを散布間隔の目安として薬剤散布を行います。</p> <p>かいよう病の発病した枝葉は伝染源となるので、できるだけ除去し、園 外に持ち出し適切に処理してください。</p>
	かいよう病	並	
	ミカンハダニ チャノキイロアザミウマ	並 並	
茶	炭疽病	並	二番茶残葉に炭疽病の発生がみられる茶園では、三番茶でも多発する恐 れがあるため、三番茶萌芽期～1葉期に重点的に防除します。
	カンザワハダニ チャノコクモンハマキ チャハマキ チャノホガ チャノミドリヒメヨコバイ チャノキイロアザミウマ クワシロカイガラムシ	並 並 やや多 並 並 並	<p>カンザワハダニ、チャノキイロアザミウマは、多発してからでは防除が 困難になるので早期発見・防除に努めます。</p> <p>チャノコクモンハマキとチャハマキの防除適期は、初蛾最盛期の7～ 10日後で、両種の発蛾最盛期の差が10日以内であれば同時防除が可能で す。</p> <p>クワシロカイガラムシの防除適期は、幼虫ふ化最盛期です。時期を逸す ると防除効果が低くなりますので、ふ化状況を確認してから薬剤散布を行 います。</p>

1) 「発生量」は、過去10年間の発生量と比較して、今後の発生量がどの程度になるか予測したものです。

2) ※※は注意報、※は防除情報を発表していますので、詳しくはホームページをご覧ください。

3) 病害虫防除・肥料検査センターのホームページアドレスは、<http://www.jpnpn.ne.jp/miyazaki>です。

